
コイバナ： 「指の話」

成田チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コイバナ：「指の話」

【Nコード】

N3785K

【作者名】

成田チカ

【あらすじ】

男の魅力は、やっぱり「指」でしょ？ ちよっとした大人のコイバナ。今回は指の話。

「男の人のどこに魅力を感じますか？」なんて訊かれることがたまにあるけど、私はそういう時は必ず「手の指」と答えてしまう。そう言つと、必ず次の質問が続く。

「どうして？」

だって、胸板とか上腕筋とか、そんなものは服着りや隠れるのよ。でも、指は隠れない。

(まあ、そりゃあ冬に手袋はめたら隠れるけど。)

両手を組んだ指、グラスを持つ手、コンピューターのキーボードを叩く指。ギターとか楽器を弾く時の指なんて最高に色っぽいと思う。

別に私は昔から指フェチだったわけじゃない。何年か前に付き合い合ったことのある男が、実に色っぽい指の持ち主だったのがいけない。彼とは友達主催の飲み会で知り合った。友達の彼氏の友達。よくあるパターン。

少し人見知りで口数の少なかった彼の指が動く様を、テーブルの反対側から私はずっと見ていた。今思い返すと、かなり変な態度だったかもしれない。大体、隣に座っていた男が鬱陶しかったのかもしれないと思う。

しばらく見ていたら、それに彼が気付いてボソツと言った。

「何？」

私は確か、何か楽器でもやってるのかって訊いたんだと思う。ギターが好きだって彼が言つて、それから少し音楽の話で2人で盛り上がった記憶がある。

でもその時は別に「お持ち帰り」されるほどには盛り上がりなかつたから、飲み会がお開きになってそのまま別れた。まさかその1週間後に街の本屋でばったり再会するとは、その時は全く思ってい

なかった。

私たちは本の話で盛り上がり、携帯番号とメールのアドレスを交換して別れた。その帰り道に彼とメールでチャット状態になったのはすごく意外な展開だった。人見知りの彼は、メールでは結構おしゃべりだった。

私たちはそれからちよくちよく2人で会うようになった。

それから数週間後、2人で歩いている時に彼が手を繋いできて、初めて「あれ？私たちって、付き合ってるんだっけ？」と思った。彼の長い指が私の指に絡まるのがとても気持ちよかった。

ある日、彼の部屋に遊びに行くと、彼がギターを弾いて見せてくれた。演奏中、私は彼の指から目が離せなかった。終わった後に、彼が私に尋ねた。

「ギター、弾いてみたいの？」

どうして？と尋ねた私に、彼はだっつと指しか見てなかったじゃないと言つて笑った。そのまま彼の指が私の顔や髪に触れて、その時初めて知った。

私は、この指に触れて欲しかったんだ っつて。

その後、色々あつて結局その彼とは別れてしまつたけれど、今でも男の人を見るときは指を見てしまう。

その指に触れられたいかどうか それが私の基準だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3785k/>

コイバナ： 「指の話」

2010年10月15日01時04分発行